三味線弾き語り・桃山晴衣さんの生涯

「梁塵秘抄」再現 〝うた〟を探究

「にんげんいっぱい うたいっぱい」発刊

美濃で活動、エッセーや歩み

「梁塵秘抄」ゆかりの地・青墓で、三味線弾き語りをする桃山晴衣さん＝1990年10月、大垣市青墓町の円興寺

〝うた〟は生命と暮らしの発露―と三味線弾き語りでその世界を探り続けた桃山晴衣さん（1939～2008年）のエッセーや活動をたどった「にんげんいっぱい うたいっぱい」（工作舎）が発刊された。美濃・青墓（大垣市）とも関わりの深い中世歌謡集「梁塵秘抄」の再現に取り組み、後年は郡上市を活動拠点とした桃山さん。明治以降の近代化とともに暮らしに脈打つうたの力が薄れゆく現状を危惧しつつも、うたの魅力とその源を幅広い視野で模索した記録になっている。

若くして三絃家元、古曲宮薗節入門など邦楽の世界にいた桃山さんが、うたを語り、生の表現との思いを深め、たどり着いたのが「梁塵秘抄」だった。青墓出身の遊女・乙前の口伝などを後白河法皇がまとめた中世はやり歌（今様）集は、「遊びをせんとや生まれけむ戯れせんとや生まれけん遊ぶ子どもの声きけば我が身さえこそ動がるれ」など、民衆のおおらかな生のほとばしりがある。そんな時代を超えるうたの力とうたの場を、桃山さんなりに現代によみがえらせたのが岐阜をはじめ国内外で行った梁塵秘抄コンサートだった。

同時にうたの探究は、暮らしに息づくうたが現代社会から失われているのでは、というジレンマと重なった。《文化はいつも生活とともにある。うたや、もの売りの声や、子どもの声が、生き生きと聞こえてくる環境をとり戻したい》。民族楽器を駆使するパーカッショニスト土取利行さんとパリで出会い意気投合、立光学舎を創設し、郡上を暮らしと活動の拠点にもした。

本の前半では「於晴会」機関紙などに連載したエッセー、論考などを紹介。家元制への安住を嫌いつつも邦楽の伝承、手ほどき・口伝などの意義も語り、《義太夫、一中、宮薗…などの浄瑠璃は皆、人の名前なのだ》と自己表現、オリジナルを第一とすることへの桃山さんの共感がある。また竹内庸介（三絃師）、添田知道（演歌師・添田唖蝉坊の長男）、井野川幸次検校（平曲）らとの対談・インタビューは、邦楽、芸能者の貴重な証言になっている。

後半は、土取さんと共に参加した世界的演劇人ピーター・ブルックとの公演やアジア、アフリカの民族音楽、芸能者との交流をたどっている。そこに通底するのはうたごころだ。さらに、「古代、中世に出会える」と郡上で取り組んだわらべ唄や祭り、郡上おどりなどを通した交流に、生活と人々のふれあいを見つめる目がある。うたの魅力を信じ続けた桃山さんの探求は、個人と組織、暮らしと表現の形など現代社会への問い掛けにもなっている。

◇　◇

「にんげんいっぱい―」は工作舎刊、四六判・388ページ、本体4500円。

桃山さんの活動をまとめた「にんげんいっぱい うたいっぱい」